

3回留学したOGが体験交え講演 大切なのは「やる気」と「挑戦」

『What's Up Outside? やってみなくちゃわからない!!あなたも今日から挑戦者の1人になりませんか?』。こんな呼びかけで、社会のさまざまな分野で活躍するOB・OGらと在學生が交流するイベント(法学部主催)が12月18日、多摩キャンパス法学部2階のリソースセンターで開かれた。

◆2009年法卒の 橋本美緒さん

この日は、2009年法学部卒で、現在、大和証券キャピタル・マーケットに勤務している橋本美緒さんが、在学中の留学体験をはじめ、就職活動から現在の仕事に関する事まで、具体的な話を交えて講演。会

場が集まった在學生らは、今後の学生生活の参考にしようという熱心に聞き入っていた。

橋本さんは、2005年に法学部国際企業関係法学科に入学。卒業するまでに『やる気応援奨学金』を3回活用して、海外に留学、研鑽を積んだ。

1回目は「海外語学研修部門」を受給して、1年生の春休みに米サンディエゴに語学留学。2回目は「短期海外研修部門」を受給し、2年生の夏休みに国際金融証券インターンシップに参加した。3回目は「一般部門」を受け、2年生の9月から約1年、ニューヨークのBerkley Collegeへ認定留学した。

橋本さんは、当手を振り

返り、「私は、帰国子女でもないし、特に英語ができたわけでもなかった。だけど、留学する意志は誰よりも強く、学力以上のやる気



講演する橋本美緒さん(中央)。右は三枝幸雄・法学部教授

と話し、多くの学生が積極的に『やる気応援奨学金』を活用することを推奨。「1ヶ月の短期留学でも人脈が広がり、絶対に行った方がいい」と重ねて強調した。

Berkley Collegeに留学中の生

◆「やる気応援奨学金」 活用を

があったし、自分にできることは全てした」と強調した。

そして、「やる気応援奨学金でもらえる30万円、100万円というお金はなかなか稼げるものではない」

活について橋本さんは、「楽しいことばかりではなかった」と紹介。寮での生活は、4人一部屋で、1人になるスペースがなかった。しかも、「ルームメイトのアメリカ人の女の子はルールを守らない」で、毎日のように知らない人を呼んでパーティ三昧だった。

「相手に迷惑をかけないという日本人にとっては、当たり前のことが通じない。相手に合わせることも大切だが、自分の意見を主張することも大切だと思いつた」という。

◆授業は受け身ではダメ

また、学校の授業は「日本と全く違って、受身ではなく、自分から発言しなければ授業に参加できず、最初は戸惑った」と話し、「日本に帰りたいと思うこともあった」という。また、授業は午前9時から午後2時までで、「自由な時間があ



橋本美緒さん

りすぎて、ライフスタイルをどうつくったらいいか分からなかった」と振り返った。それでも「6ヶ月くらいで授業が分かるようになってきた。自分の力を100%出して勉強すればAをとれた。毎日が生き生きして、充実していることを感じた」と橋本さんは笑顔で話した。

に認定留学している時期は、日本では3年生が就職活動をする時期でもあった。それで、橋本さんは留学中に企業の人と会う機会が得られる「ポストン・キャリアフォーラム」に参加した。キャリアフォーラムとは、海外の大学・大学院で学ぶ日英バイリンガルの留学生に就職機会を与えるもので、400社もの外資系や日本企業が参加する。会場は7700人もの留学生で埋め尽くされていた。

「中央大学のバリアフリーを考える」シンポジウム（創立125周年記念企画実行委員会主催）が12月18日、多摩キャンパスCスクエア小ホールで開かれた。シンポジウムには、経済学部の濱岡剛教授、文学部の田中暢子兼任講師、それにボランティアサークル『ほのぼの』、社会福祉サーク

ル『青い鳥』のメンバーがパネリストとして参加した。まず、『青い鳥』の河本圭敬さんと横山朝里さんが、授業で聴覚障害学生をサポートするノートテイクの人員不足や車椅子学生に対する支援不足など現実に抱える課題を指摘し、「大学の障害学生支援の部署がバラバラで、縦割りになっ

ている」と問題提起した。そのうえで、早大に『障害学生支援室』、東大には『バリアフリー支援室』といった窓口が設置されていることを紹介し、「中大にも統一的、総合的に障害学生をサポートする部署ができれば、より一層のバリアフリー推進になると思う」と強調した。

統一・総合的な障害学生支援組織の設置を「中大のバリアフリーを考える」シンポジウムで開催

留学生の中には、ハーバード大学卒やすでに職業経験を持つている学生もいたが、橋本さんは、エントリーシートの書き方さえもわからなかった。

「そんな中、面接を受ける中で、切実に感じたことがある」と語り、橋本さんは真剣な眼差しで、「それは、アジア人としての自覚です」と一段と声を大きく

した。続けて橋本さんは、「日本から離れ、外国で生活して異文化を経験したからこそ初めて、日本の素晴らしさやアジアの目覚ましい成長に気づくことができた」と指摘。そして、「日本人として、アジアに貢献したいと自然に心から思うようになった」と強調した。現在、大和証券キャピタル・マーケティングのコーポレートアクセス部で活躍する橋本さんは、「点（留学）でやってきたことが、線（企業）で結ばれた」と話し、在学生に対して「海外留学じゃなくても、自分がやりたいことを大切にして、挑戦して欲しい」とエールを送った。（学生記者 宮寺理子 法学部2年）



シンポジウムに参加したボランティアサークルのメンバー

これに関連し、田中先生は「スペシャリストが各部署にアドバイスしていくのがよい」とし、濱岡教授は「新しい組織が必要なのはわかるが、具体的にどういう形にするかを考えていかないといけない」と指摘した。

続いて、参加者らが視覚障害者を疑似体験するゲームを行った後、『ほのほの』の奥山陽さん、石山英美子さん、小島友里さんが、現状報告。この中で小島さんは、視覚障害学生に対するサポート態勢について「現状は対象者がいないため無くなっている。視覚障害者は本学の門を叩くことに気が引けてしまうだろう」と対策の必要性を訴えた。

この中で、とくに広報態勢が問題点としてあげられ、石山さんは「聴覚障害学生にとって、各事務室に掲示されている告知のポスターだけでは、情報が足りません」と指摘し、ホームページでの情報拡充を求めた。

対策として学外広報については、ホームページに「障害をお持ちの方へ」というバナーをつくったり、大学案内のパンフレットに障害学生支援のページをつくらせたりすることなどが提案された。

またノートテイクに関し、石山さんが「先生方の協力も必要です」と述べたのに対し、濱岡教授は「もしノートテイクが必要なら、レジュメを用意し、早口にな

日比交流サークル『Poco POCO』（代表・中島史絵さん）は1月18日、八王子市立由木東小学校で、フィリピンに対する理解を深めてもらおうと、小学5年生を対象に模擬授業を行った。同校の理解を得て、初めて実施したもの

らないようにする。それは他の学生のためにもなる」と紹介した。

その後、会場に集まった人も交えたディスカッションが行われ、参加者からは「総合的な大学の支援よりも、学生が主体となった組織に大学を取り込んでいくことが大事」などの意見が出された。

最後にパネリストが一言ずつ感想を披露。田中先生は「バリアフリーに絶対的

で、今後も数回行う予定だ。この日、同小学校に向いて臨時の先生として授業を行ったのは、樋口隆広さん（商学部4年）ら10人。「総合学習」の時間を使って、5年生の教室で行われた授業では、樋口さんがまず、「フィリピンという国

な答えはない。関心を持たない社会こそ障害をもつ方の学生生活のバリアをつくる。一人でも多くの関心をもつ人を増やしていくことが重要です」と強調。また濱岡教授は「障害者の声を汲み上げていくことは、活気のある大学に繋がっていく」と語り、シンポジウムを締めくくった。

（学生記者 堀滝登二文学部4年）

小学校で日比交流の模擬授業 サークル『PocoPoco』が映画も上映

を知っていますか」と語りかけると、生徒からは「バナナとか果物が多い」「気温がアツそう」といった答えがかえってきた。

生徒は日本との文化の違いに興味をもった様子で、「宿題はありますか」「勉強はどれくらいしています



由木東小学校でフィリピンについて話す樋口隆広さん（右）

か」などと熱心に質問。樋口さんは、路上にダンボールを敷いて寝ている子供やシンナーを吸う子供の写真などを見せながら、「この子供達は、ストリートチルドレンと呼ばれ、親を亡くしたり、捨てられたりした子供たちです。11歳といえば、フィリピンでは、働

いている年齢でもあるんですよ」と分かり易くフィリピンの厳しい貧困の現状について説明した。樋口さんらは、授業で生徒に描いてもらった日本を紹介する絵を、機会をみてフィリピンに持参して子供達に見せ、両国間の理解と交流を図る計画だ。

授業を終えて生徒は、「同じくらいの年齢の子がホームレスでびっくりした。でもフィリピンに行ってみたら」などと語り、フィリピンへの関心を深めていた。同小学校の池田康雄校長は、「今回、中大の学生さんには、授業の補助として国際理解を深めるために授業しても

らいました」と語り、通常の教育実習とは違ったこの日の授業に理解を示した。

『PocoPoco』は、野口彰英さん（法学部4年、3年までフィリピン大学に

留学）が、1年生の時のフィリピン留学で、現地のNGO『セブ子ども教育支援ブルメリア』のフィールドワークに参加した際、ストリートチルドレンなど貧困にあえぐ子供達をみて、「学生ができる支援がしたい」と考えて、立ち上げたサークル。

活動の柱は、日本では小学校までしか使われない鍵盤ハーモニカを集め、フィリピンの小学校や孤児院などの施設に寄贈するプロジェクト「CHAP」で、こ

れまでに3回、フィリピンを訪ね、セブの小学校や孤児院などに数多く寄贈した。また昨年12月21日には、フィリピン映画祭を多摩キャンパスのCスクエアで開催。マニラのストリートチルドレンやホームレスなどを実写した映画『マリアのへそ』と『BASURA』の2作品を上映し、「フィリピンの貧困と私達の責任」をテーマにパネルディスカッションを行った。

（学生記者 豊福三晃 文学部3年）

小学生対象に「中央大学陸上教室」開く 選手の指導で走って、投げて、跳ぶ

都内の小学3〜6年生を対象にした「中央大学陸上教室」（東京陸上競技協会主催）が2月19日、多摩キャンパスの陸上競技場で開かれた。東京陸協が行っている陸上教室に中央大学が協

力して実現したもので、本学を会場に実施されたのは初めて。約100人の小学生が参加し、模範演技を見たり体験レッスンを受けたりして陸上競技の面白さを満喫していた。

開校式では、本学OBで東京陸協理事・普及部長の田中右一さんが、「体験教室は今回で4回目。これまでは中学校の校庭でしたが、今回は大学の本格的な競技場です。大いに陸上の楽し

さを感じて欲しい」と挨拶
 Ⅱ写真左。大学からは元陸
 上競技部監督で現相談役の
 木下澄雄さんが、「この体



験教室を通して、何か1つ
 でも2つでも学んでもらい
 たい」と小学生を激励した。
 この後、「先生」を務め
 る中央大学陸上競技部の選
 手（OB含む）21人が紹介
 された。いずれも大学トッ
 プレベルの選手達だ。
 ウォーミングアップのあ
 と、大勢の保護者が見守る
 中、参加者全員が50メート
 ル走のタイム計測を行った
 Ⅱ写真下。模範演技で短距



離の川面聡太選手が5秒4
 のタイムを出すと、自分達
 より1秒も早いのに小学生
 は目を丸くしてビックリ。

ハードルの模範演技では、
 三宅修司選手と中野竜選手
 が、10〜15メートルのハン
 デイを背負って、男女各1
 名の小学生と競争。何と2
 連敗するという結果に、三
 宅選手が「なんにもいえ
 ねー」と懺悔すると、会場
 は大きな笑いで盛り上がっ
 った。
 走り幅跳びの模範演技で
 は、大塚翔太選手の7メー
 トル70センチを越す大きな

跳躍に、歓声があがった。
 走り高跳びでは茂垣之寛選
 手が、2メートルに挑戦。
 1回目は成功したが、2回
 目は失敗。「もう1回」の
 声で、3回目に挑み、今度
 はバーに触れず、きれいな
 背面跳びを見せたⅡ写真左
 棒高跳びでは、応援に来た



筑波大学出身の川口直哉選
 手（モンテローザ所属）が
 4メートルを軽々と成功。
 4メートル50センチ以上の
 高さもクリアⅡ写真右Ⅱす
 ると、参加者からどよめき
 があがった。

投擲（砲丸投げ、やり投
 げ、ハンマー投げ、円盤投
 げの4種目）では、女子の
 日本記録に男子選手が挑戦。
 日本記録を超えられない種
 目もあったが、選手呼び
 かけで砲丸やハンマーを手
 にした小学生たちは「すご
 く重い」と実感。逆に円盤
 には「軽い」と正直な感想
 が飛び交った。

模範演技のあと、参加し
 た小学生は希望種目に分か
 れて体験レッスン。短距離
 走では、「足を速くしよう」
 とスタートダッシュにチャ
 レンジ。「一番を指そう」
 という選手からの声かけに、
 懸命に力走。ハードル走で
 は、小さくて低いハードル
 から始め、選手と小学生が
 リズムを合わせて並んで
 ハードルを跳んでⅡ写真次
 頁Ⅱ、タイミンングの練習を
 した。

走り高跳びでは、まず
 マットにのってやわらかさ
 を体感し、選手は「怖がら
 ないことが大事だよ」と指



導。走り幅跳びの跳び方で、選手が「マリオのジャンプを思い出して」と分かり易く説明すると、小学生は笑顔で挑戦していた。また、やり投げでは、小さなロケットのような形をしたジャベリックスローを使って、投げる練習を繰り返した。

長距離では、1000メートルを選手が小学生に声をかけながら共に走った。正月の箱根駅伝で9区を走った井口恵太選手は「頑張った最後まで走りぬくことが大切。走り終わった後は楽しいと思えます」と小



学生を励ましていた。

最後の閉校式では、ジャンケン大会で大いに盛り上がった。選手に勝つと、カレンダーがプレゼントされたほか、参加賞の中大特製タオルが配られ、写真右のように、小学生は大はしゃぎ。その後、選手のサイン会が開かれ、小学生はカレンダーやタオル、メモ帳、シャツなどにサインをもらい、楽しかった1日の思い出に残していた。写真下。

教室に参加した下村昂輝くん、平塚謙志郎くん、金子遼平くん、富田凌矢くん（立川市立第4小学校4年）の4人は、「楽しかった

た。お兄さんたちは上手で、優しくて、おもしろい」と元気に答えてくれた。

立山亜佑ちゃん（八王子市立由木東小学校3年）は、「投げるのが一番



（在住）は、「中央大学は家からも近いので参加した。現役の選手の演技を間近で見ることができてよかった」と満足げ。また、小4の甥っ子と

楽しかった」と笑顔。嶋田早紀ちゃん（立川市立新生小学校6年）は、「陸上は前から好きで、今度、立川マラソンに参加します」と長距離ランナーを目指す。ハードル走で選手と競争した三須恵美香ちゃん（港

区立白金小学校3年）は、「45メートルなら、選手に勝てると思った。選手は早かった。体験教室に参加して楽しかった」とまだ興奮した様子で話してくれた。また、小4の子供と参加した北沢亮さん（稲城市

来たという花井小百合さん（練馬区在住）は、「大学の環境も教えてあげたかった」と天然芝とアンツーカーの本格的グラウンドでの陸上教室開催を喜んでいた。（学生記者 荻原陸 法学部3年）

本学と北海道立総合研究機構が連携・協力 協定書に調印 期待される相互発展

学校法人・中央大学と地方独立行政法人・北海道立総合研究機構は、両機関の包括的な連携・協力関係を推進するための協定を締結することになり、3月1日、

後楽園キャンパスで、調印式が行われた。同機構が北海道以外の大学と協力協定を結んだのは、これが初めて。

調印式には、本学から永

井和之学長はじめ加藤俊一副学長（理工学部教授）、石井洋一理工学部長、齋藤邦夫理工学研究所長ら、北海道立総合研究機構からは丹保憲仁理事長、下小路英

男理事らが出席。永井学長と丹保理事長が、それぞれ協定書に署名した。北海道立総合研究機構は2010年4月に、農業、水産、森林、産業技術、環境・地質、建築など22の道立試験研究機関を統合して発足した機関で、未来に向けて夢のある北海道づくりに取り組んでいる。



調印を終え、握手する永井学長(左)と丹保理事長

本学では2010年に、国連が提唱する「国連アカデミック・インパクト」への参加を表明し、国連とともに世界規模の問題に取り組むことを宣言しており、同機構との連携・協力を推進することで、「実学」の建学の精神に立って、社会・人類の発展に貢献する人材の育成を目指す。

具体的には今回の協定締結により、本学は国際的な視野を持った高度な水環境・水処理技術者を育成するために、同研究機構の協力を得る。他方、同研究機構は本学の人文社会系分野と連携することで、北海道の地域活性化に貢献する。例えば市場分析や経済効果の検証などへの本学の知見の活用が期待されている。

協定書に署名後、永井学長は「今後、互いに手を携えて研究・教育していくことで、非常に大きな成果が生まれる。中央大学はその期待に応えられるよう、邁進していきます」と挨拶。また、丹保理事長は「私どもの研究機構には文系がありません。蝦夷が江戸と連携することになり、大いに発展できればいいと思っています」と述べ、本学との連携・協力を大きな期待を寄せた。

(編集室)

学生記者になりませんか

学生記者が取材・編集する大学広報誌



● 卒業の日に 贈る言葉 永井和之校長・学長ほか
 ● 「Campus Now」 画像—それぞれの春
 ● 11年春・・・学生記者 最後の<私>ニュース



「Hakumonちゅうおう」は中大生が取材・編集する大学広報誌です。

現在、多摩と後楽園キャンパスそれぞれで1、2年生の学生記者を募集しています。

- 元新聞社論説委員のプロや先輩の学生記者に取材方法・原稿の書き方はじめ添削指導を基礎から受けることができます。将来どんなキャリアをめざすにも文章力が重要です!
- 取材を通して、さまざまな人に出会うことができます。出会いの数ほど思い出ができることでしょう。
- 記者活動を通してコミュニケーション能力など「社会人基礎力」を身につけることができます。

申し込み・
問い合わせは

中央大学広報室『Hakumonちゅうおう』
 編集担当：伊藤博まで
 Phone：042-674-2048 (直通)
 E-mail：hiroito@tamajs.chuo-u.ac.jp